

【天声人語】2007年02月14日（水曜日）付

市街地では、鉄道は街を貫いて走っている。あちこちで貫かれ、隔てられる町並みは、開いた踏切でつながる。踏切は、街と街、人と人をつなぎつつ隔てている。

東京都板橋区の踏切のそばで、痛ましいことが起きた。東武東上線ときわ台駅で、踏切から線路内に入った女性を助けようとした警察官が電車にはねられた。意識不明となり、6日後に亡くなった。

死亡した宮本邦彦巡查部長は、踏切のすぐそばの駅前交番に勤務していた。親身な仕事ぶりで、地域の人たちに親しまれていたという。今度も、女性を何とか救い出そうとしたのだろう。自らの命が危険にさらされた時、電車が頻繁に行き交う踏切に入るなどということは、なかなかできるものではない。

警察官ではないが、十余年前の冬に、東京の下町の踏切でこんなことがあった。スキーに行く予定の青年たちが、踏切のそばで待ち合わせていた。反対側から来たバイクが急ブレーキをかけてスリップし、遮断機が下りていた踏切の中に倒れ込んだ。

ふたりの青年が助けに入り、バイクを踏切の外に出そうとしたところに電車が来た。一人の青年が、はねられて亡くなった。この青年の同僚が言っていた。「会社に新人が入ってきたとき、わからなくて悩んでいる様子を見ると声をかけていました。見て見ぬふりができない性格だったと思います」

昨日、ときわ台の駅前交番では、人々が列をなして記帳していた。時折、そばの踏切で警報機が鳴る。どこででも聞くあの音の中に、宮本さんを悼む弔鐘の響きを感じられた。